

春風秋霜

江利川毅 県立大理理事長



わが国の最大の課題は人口減少問題である。今回は数字を追って実態を見ていこうという。

人口を減少させないためには、合計特殊出生率（一人の女性が一生に産む子供の平均数）が2.07を超える必要がある。わが国は、第2次ベビーブーム期（1947年から74年）までは基本的には2.0を超えていたが、75年に1.91となり、以後年々減少して2005年には1.26まで下がった。その後少し持ち直して13年には1.43となっている。しかしながら出生適齢期の女性の数が減少している

人口減少は最大の課題

社会の構造改革必要

ため出生数は年々減少し、昨年は100万人である。ちなみに、私の生まれた47年はベビーブーム期の最初の年で、出生数は2

88万人である。なお2.07を達成しても直ちに人口減少が止まるわけではない。当分の間、人口は減り続け、静止状態になるまでに50、60年かかる。人口構造の高齢化については、私が厚生省に入省した70年に総人口の7%に達し（高

齢化社会）、04年には14%を超え（高齢社会）、07年には21%を超え（超高齢社会）、13年には25.1%となっている。

生物が地球上に誕生し、進化し今日があるが、動物は基本的に子供を産み育てている。進化の頂点に立つ人類もそのDNAは引き継いでいるはずである。少子化は一見そのDNAに反する現象である。しかし、結婚するものにする、それは人間社会になる。

一方、子が親の世話をするという現象は動物の世界にはない。知識・知恵を継承する人類が故に高齢者を大事にする文化が育まれたのだと思う。これはDNAにはない行動形態である。健康長寿は古くから人類の夢であった。高齢化は長寿が実現した結果であり、プラス評価をすべきものである。長寿を意義あるものにする、それは人間社会になる。

68万人である。

た若い夫婦は子供を2人以上希望している。問題はその希望を阻んでいる社会要因にあり、その除去が対策の基本となる。そのためには日本社会に定着して

の知恵と工夫の問題である。よく少子高齢化と一括りに言われるが、少子化と高齢化は全

25年には団塊の世代が全て後期高齢者になる。推計では00年には高齢者が総人口の4割になる。注目すべきはその内訳で、

の社会的影響に十分留意し、しっかりと備えていく必要がある（表参照）。

静止状態になるまでに50、60年かかる。人口構造の高齢化については、私が厚生省に入省した70年に総人口の7%に達し（高

齢化社会）、04年には14%を超え（高齢社会）、07年には21%を超え（超高齢社会）、13年には25.1%となっている。

生物が地球上に誕生し、進化し今日があるが、動物は基本的に子供を産み育てている。進化の頂点に立つ人類もそのDNAは引き継いでいるはずである。少子化は一見そのDNAに反する現象である。しかし、結婚するものにする、それは人間社会になる。

一方、子が親の世話をするという現象は動物の世界にはない。知識・知恵を継承する人類が故に高齢者を大事にする文化が育まれたのだと思う。これはDNAにはない行動形態である。健康長寿は古くから人類の夢であった。高齢化は長寿が実現した結果であり、プラス評価をすべきものである。長寿を意義あるものにする、それは人間社会になる。

次回同、人口減少の問題点、少子化・高齢化への対応について、私の経験も織り込みつつ述べていこうとする。

人口の将来予測と人口構造の変化（○内は構成比）

	2010年国勢調査	2025年予測	2060年予測
総人口	12806 (100)	12066 (100)	8679 (100)
0～14歳	1684 (13.1)	1,324 (11.0)	791 (9.1)
15～64歳	8,173 (63.8)	7,085 (58.7)	4,418 (50.9)
65歳以上	2,948 (23.0)	3,657 (30.3)	3,464 (39.9)
(65～74歳)	1,541 (11.9)	1,479 (12.2)	1,128 (13.2)
(75～84歳)	1,028 (8.1)	1,442 (12.0)	1,187 (13.7)
(85歳以上)	379 (3.0)	736 (6.1)	1,149 (13.0)

単位は万人。(注)年齢によって実数が大きく異なる 厚生労働省 社会保障・人口問題研究所

(次回は2月2日付)